

分科会21

ピアスタッフが抱えるジレンマを考えよう！ ～ピアの視点、専門職の視点、併せ持つ視点～

シンポジスト：小川瑛子（山梨県・住吉病院医療相談地域連携室）
坂元英文（広島県・NPO 法人びいあらいぶ）
松井道久（東京都・青梅精神障害者ピアサポートグループぶ〜け）
松原祐（千葉県・NPO 法人びあさぼ千葉）
盛健一（東京都・NPO 法人多摩在宅支援センター円）

コーディネーター：古屋龍太（日本社会事業大学）
添田雅宏（日本社会事業大学）

既に日本国内のあちこちで、精神疾患を有する「ピアスタッフ」「ピアサポーター」と称される方が、精神保健福祉医療現場で従事している。ピアによるサポート活動は、十分な実績と一定の科学的根拠が形成されつつある有力な支援アプローチであり、アメリカやイギリスなどでその有用性は強く認識されており、「認定ピアスペシャリスト」「経験によるエキスパート」として、資格制度や行政施策・研究に参画するシステムを確立させてきている。しかし、日本では精神保健福祉関係者あるいは当事者においても、十分にその有用性が認識されていない現状にある。そして、各現場のピアの立場の方々が最初に直面するのが、自分はクライアントにピア（仲間）として関わっていくのか、それとも専門職チームの一員として関わっていくのかとの立場性の問題である。

この分科会では、ピアスタッフが抱えるジレンマを話題の中心に据えながら、日本の精神保健福祉現場におけるピアスタッフの有効性を未来志向で語り合うことを目標とした。

シンポジストたちは、それぞれの自身の体験から実感される課題の提起を行った。

坂元氏は「メンバースタッフ」として従事する経験から、健常者主体のスタッフチームの中でピアが「宙ぶらりんな存在」であることを述べた。

松井氏は、仕事をきちんとしていれば健常者とか精神疾患を有する者ということは無関係であり、他者とのコミュニケーションが最も必要であることを強調した。

小川氏は、一度「患者」になると人として認められなくなる精神科病院の世界で、「ピア PSW」として言われることへの違和感を述べ、「あなたはどの立場で言っているのか？」と常に問われる現状の中で「ひとりの人として語ること」の大切さを訴えた。

松原氏は、日本的な人間関係の社会でピアスペシャリストの持つ二律背反性を「片子の悲劇」の例を引きながら述べ、境界線と距離の取り方、信頼される人間関係の重要性を提起した。

コーディネーターの添田は、自身が教員を勤める通信教育科の精神保健福祉士課程で「ピア PSW コース」を設けた経緯と現状の課題について触れ、古屋は、リカバリーを志向する専門職と当事者の立場の統合が進むアメリカの SOAR のような未来像を共有することの必要性を述べた。

2時間半の限られた時間ではあったが、約 80 名の参加者で満席の会場からの質疑応答も活発で、それぞれの体験を踏まえたピアスタッフの抱える問題の提起がなされ、後半行われたグループ討議でも率直な意見と体験の交流がなされた。最後の全体討議では、各グループでの討議を報告し共有し合い、この国で「ピアスタッフ」「ピアサポーター」と称される活動の輪を拡げていくこと、そして既存の精神保健福祉医療を当事者主体のリカバリー志向のサービスに転換していくことを目指し、来年も再会することを確認し合った。

《古屋龍太（日本社会事業大学）》